

特別講演「首里城の復元と沖縄の文化」

高良 倉吉*1

実施年月日：平成 22 年 11 月 21 日（日）

実施場所：沖縄県立博物館・美術館

今日はデジタル・アーキビスト講習会にお招きくださいます、ありがとうございます。



地元の琉球大学で、沖縄の歴史、琉球史というものを学生と一緒に勉強しております。私のところには、もちろん地元の若い学生だけではなくて、他府県からも結構たくさん来ています、北は北海道から南は鹿児島まで、あちこちから来ておりますし、中国、韓国と、ベルギーであるとかドイツであるとか、そういうところからも沖縄の歴史を勉強したいという学生たちが来ておまして、大変にぎやかなゼミを営みながら、私も学生たちの刺激を受けながら勉強しているということです。

今日は一応、11時半までお時間を頂戴しておまして、私が勉強しております沖縄の歴史、琉球史というものを通して、特にその中で首里城の復元というものに関連しながら、考えているところをおしゃべりのかたちで皆さんにお話しして、何らかの参考になればという気持ちで今日はお引き受けしました。

まず、私は大学の教師になる前は、大学を卒業しまして、沖縄県庁の中にありました沖縄史料編集所というところの職員になりました。その沖縄史料編集所というのは、県の教育委員会に付設された組織でして、沖縄の歴史や文化に関する史料を収集して、それを編集して、さまざまな史料集を出すというのが主な仕事でした。そのために、沖縄県内各地はもとより、他府県でありますとか、外国でありますとか、そういったところを史料を収集して歩くということをして、10数年にわたってやっておりました。

その後、1年間は沖縄県立博物館に勤めまして、博物館が持っている歴史資料を少し検討する、そして展示に生かしていくという作業をいたしました。

それから、今度は県庁を辞めまして、この那覇市の隣に浦添市という市がありますが、その市立図書館の館長になりまして、6年間ですか。地域の小さな公共図書館だったのですが、そこで市民にいかん図書館サービスを定着させるかということをして、職員と一緒に6年間やりました。

それから、私がいま勤めています琉球大学というところに行きまして、そこで先ほど申し上げましたように、若い人たちと一緒に琉球史を勉強するようになったということです。

特に、25年前から首里城の復元というものが始まりまして、いま私の頭のたぶん3分の1は、首里城のことでいっぱいというぐらいに、首里城漬けの日々を過ごしています。

1992年という年は、沖縄が日本に復帰した20周年という節目だったのですが、その1992年の11月に、取りあえず中心部分は

*1 TAKARA Kurayoshi : 琉球大学

公開しましょうというスケジュールで復元をしてまいりまして、首里城の中心部分、だいたい首里城の建築空間でいけば 50 パーセントぐらいを復元して、一般に公開したということです。

しかし、それで終わったわけではありませんで、その後も引き続き、着々と復元作業を進めておりまして、現在もやっております。あと 5 年かかるか、10 年かかるか分かりませんが、まだ懲りずにやっているという状況でございます。

今日は、その首里城にかかわったことも含めて、皆さんにお話をしてみたいと思います。

お手元に資料をお配りしています。デジタル・アーキビストの皆さんには、本当にアナログっぽい情報で申し訳ありませんが、メモのつもりでつくりました。資料は 1 ページが、私が今日お話をさせていただくメニューになっていまして、2 ページは、他府県から来られた方にはなかなか分かりづらいと思いましたので、沖縄の歴史がどういう流れでこんにちに至っているかということ、一般の日本史の時代と対照しながら分かるように、メモをつくりました。

3 ページが、今日お話ししますけれども、かつて琉球と呼ばれた島々が、アジアとどのように交流したのかということを示したメモです。4 ページは、なかなかこのようにズームインした地図はご覧になる機会がないと思うのですが、沖縄県というのは実はこのように、広い海に小さな島が散らばってできている地域だということを見ていただくためにつくりました。

最後の 5 ページ目は、私たちが現役の時代にここまでは復元したいという、その復元したイメージを表現したものであります。現在、5 ページの資料に示したものの、だいたい 7 割弱ができているという状況であります。

この 3 枚の資料を使って、今日はお話をさせていただきます。

まず、私の仕事ですけれども、二つ大きなテーマがあります。一つは、かつて首里城という城に王様がいて、その王様が島々を治めるといふ、それを私は琉球王国、琉球キングダムと言っておりますけれども、そういう王国がかつて存在したと。500 年間にわたって存在しました。この琉球王国という、かつてこの島々に存在した独自の政治的な存在、その実態を描くというのが、まず私の仕事です。

沖縄には泡盛というおいしいお酒があるものですから、泡盛を飲み過ぎて、あまり勉強していませんけれども、ちょこちょこ勉強しまして、ここに書きましたように『琉球王国の構造』という本を書いたことがあります。それは、首里城の王によって、島々がどのように支配されていたかという問題を、当時の資料を使って細かく検討するという、ややマニアックな仕事をした成果ですけれども、これに象徴されるような琉球王国という存在と、その実態を検討するというのが私のテーマの一つです。

二つ目は、それに関連するものとして、琉球王国というものが、決して沖縄の小さな島々に閉じこもって歴史や文化をつくったのではなく、広くアジアと交流しながら、アジアの刺激を受けながら、この小さな島々が独自の文化をつくっていくという。つまり、アジアと絶えず接触しながら、交流しながら自分たちの歴史や文化をつくったという問題を、アジアを視野に入れて考えるということが私の二つ目のテーマとして、このためのラフスケッチのようなものを、『アジアのなかの琉球王国』という本の中で描きました。

まず、その 1 番目のテーマに関する問題として、4 ページを見てください。ちょっと見づらいかもかもしれませんが、沖縄県とい

う県は、地図で表現するとこのような広がりになっています。左手に東シナ海という大きな海がありまして、その向こうは中国大陸ですけれども、沖縄から南のほうに行きますと台湾があって、台湾からさらにその先は東南アジアの世界ということになります。

東のほうに大きな太平洋が始まっておりまして、その北のほうに目をやりますと、現在鹿児島県ですけれども、与論島から始まる奄美の島々がある。そして、奄美の島々を過ぎてさらに北に行くと、トカラ列島という島々があります。私は3年ほどかけて、このトカラ列島の調査をしたことがありまして、大変面白い歴史を持った島ですけれども、火山活動でできた島々です。このトカラ列島の一番中心的な島は中之島という島ですが、そこに海拔が1,000メートル近い御岳という山がありまして、いまでももくもくと煙を吐いている島です。

かつて、この海を行き交う船乗りたちが海上交通の目印にした重要な島が、このトカラ列島。しかし同時に、非常に危険な海域でして、昔、トカラは七つの島、七島灘という非常に荒々しい海域でもあって、船乗りたちの記録を読みますと、ここを通過するときに、いかに緊張感を持って船を操ったかということが記録に書かれています。

トカラ列島をさらに北に行きますと、ここにありますように屋久島、種子島という島を通過して九州に至るといふ。そこからは日本の本土の世界になっていくわけです。

まず、この地図を見ていただいたのは、要するにこの島々で一番大きな島が沖縄島、あるいは沖縄本島という島で、皆さんはその那覇市にいらっしゃるわけですが、この那覇市にある首里城というお城を中心にして、かつてこの島々を支配する体制があったということです。

べつに歴史の知識がなくても、こういう地図を見て、那覇市の首里にあった首里城というお城に王がいて、島々を支配するというのは、実は大変なことだと想像できます。例えば、ずっと西南のほうに行きますと、宮古島という島があります。この沖縄島と宮古島との間の海域は、だいたい300キロメートル離れていますが、ここにはまったく島がないのです。地質学者がケラマギャップと呼んでいる海域が横たわっておりまして、目印になる島がない。

そうすると、航海術が当然必要です。目印のない海で、自分の目指す方向に船の針路を間違いなくキープするためには、優れた航海術がなければこの海域を越えられません。

そして、宮古島にやっと達すると、台湾の手前までの、与那国島までの島々が展開すると。こういった島々も含めて首里城の王は支配していますから、当然、支配の前提にあるのは、優れた船を持っていないといけない。安全に船を操縦する航海術、航海に関する知識が必要です。そういったものをどのように蓄えながら、首里城の王は支配していたのかという問題を考えなければならぬ。

さらに言いますと、船で行ったり来たりできる技術、条件が整ったとして、では具体的に島々の土地や人民というのでしょうか、人々をどのように管理したのか。どんな役人を置いて、どのように税金を取っていたのか。この当時の人間たちは、当然現代人と違って、かなり精神性の高い人たちですから、さまざまな宗教というものがあります。そういった宗教的な問題は、いったいどうだったのか。1年を通じてどんな祭りを行っていたのか。人々は首里城の王に支配されているだけではなくて、島々で生きていますから、暮らしていますから、1年を通じてどんな暮らしをしてい

たのか。そういった暮らしの中に、政治がどのように関与するのかといった問題などを考えるわけですね。

それがあって、琉球王国の実態を検討するという問題は、そういうさまざまな芋づる式につながった問題を一つ一つ確認しながら、それを解いていくという作業が、私の研究の一つだったということです。

ちなみに、お手元の4ページの地図で、沖縄島と与論島の間に複雑な線引きがされています。これは鹿児島県と沖縄県の県境を示すものです。今日は詳しいことは触れませんが、実は変な県境なのですね。徳之島という奄美の島の左側に、硫黄島という島があります。現在は無人島ですが、かつては人が住んでいた島。ここは実は沖縄県なのですね。本当は与論島と沖縄島の間横に線を引けば、一番分かりやすい県境なのですが、この複雑なラインは何なのかと。これにも歴史的な根拠がありません。

一つだけ言うておきますと、いまから400年前に、琉球王国は今の鹿児島県、薩摩の軍隊の侵攻を受けました。3,000の兵が琉球に攻めてきて、琉球側も軍事力を通じて対抗するのですが、結局圧倒的な軍事力の差がありまして敗れていくわけです。その敗れた代償として、首里城の王が支配していた奄美の島々を、薩摩に割譲するという事件が起こります。400年前の出来事でした。

硫黄島という島は、当時はもちろん人が住んでいて、硫黄という鉱物がこの島で採れるのです。皆さんご存じだと思いますが、火薬をつくるときの主成分は硫黄です。後で触れますけれども、当時、首里城の王は中国の皇帝と非常に密接な関係がありまして、琉球の王が北京に君臨する王に提供した重要な貢ぎ物が、実は硫黄だったのです。

ですから、硫黄は琉球にとって死活問題だったわけです。それを薩摩が配慮して、では硫黄島は残しましょうとあって、これを琉球の領土にそのまま残して、あとは薩摩の直轄領になりますというように取り決めた400年前の出来事が、こんにちまで続いているというわけです。それで、こういう奇妙な県境のラインができたということですね。

そういう島々を、かつて薩摩軍に敗れる以前は、喜界島とか奄美大島といった北の島々まで、琉球の王が支配していたということでもあります。私は奄美の島々を何度も調査しましたが、薩摩に敗れて直轄領として取られる以前の奄美を、首里城の王がどう支配していたのかということ伝える、さまざまな記録が奄美に残っています。奄美の島々を回って、それを丹念に調査するというのをずっとやってきましたし、現在でもやっております。

3ページですけれども、この琉球王国というものは、アジアの広がりの中で歴史や文化を形成したのだという問題です。これは私がつくった地図ですけれども、実はさまざまな記録を、琉球側の記録はもとより、交流相手の国々や地域の記録も当然リサーチしました。

それから、この地図を描くためには、特に東南アジアに関してはポルトガルの記録がありまして、ポルトガルのリスボンというところに大航海時代研究センターというものがあります。そこに何度も行きましたし、リスボン大学も行きましたし、リスボンの北にコインブラという町がありますが、そこに有名なコインブラ大学という大学がありまして、その持っている資料も見せていただいたりして、そのポルトガル資料も使いながら、かつて琉球王国がアジアのどういった国々と交流していたのかという実態を描き出すということをいたしました。

当然、この地図に描かれた地域を、ほとんど飛び回って調査してきたと。実際に自らの足で現地に出掛けて行って、例えばいまのマレーシアという国になっていますマラッカという国がありますが、いまはシンガポールから高速道路を使って、2、3時間でマラッカに行けるようになりましたけれども、そこに出掛けて行って、地元の大学でマラッカの歴史を研究している先生方に教えていただく。それから、実際に琉球の船がいかりを降ろした港を見て回る。それから、マレーシアの博物館に、どういう昔の遺物といいますか、歴史の証拠が残っているかということをしらべ歩いて歩くということをし、ずっとやってきました。

そして、これは私のようにあまり知恵のない者が、実際に現地に行って、現地に立って、琉球の人たちがいかに遠いところまでやってきたかという実感ですね。例えばマラッカなどは、もう赤道直下に近いところですよ。夜は南十字星が非常にきれいに見える地域ですよけれども。

そのマラッカに関しましては、このとき琉球の船が結構頻繁に行っておりまして、それについて、当時マラッカを訪れたポルトガル人が書き残した記録が残っています。トメピレスという人物が書き残した、非常に興味深い琉球史に関する描写が出てきます。

それから、現在はタイという国ですが、当時はシャムと呼ばれた王国がありまして、その都がアユタヤという都でした。現在はバンコクが都ですよけれども、この当時はまだバンコクはできておりませんで、いまのバンコクから70キロ北にあるのが、このアユタヤという世界遺産に指定されている町です。もちろん、そこも10回ぐらい調査に行っただと思います。

そのアユタヤで、やってきた琉球の船乗りたちと親しくなったポルトガル人がいま

す。ディエゴ・デ・フレイタスといいますが、彼が琉球人との対話の様態を書き残した記録がリスボンに残っております。

そういった記録を参考にしながら、琉球の人たちが出掛けていった世界というものの広がりや、そこに行き来できるまでどういう船を使ったのか、どんな航海技術を持っていたのか、それからどんな情報を持っていたのか。さらには、多くの国々に行っておりますので、いったいどんな言葉を使ってコミュニケーションしたのかといったことも含めて、さまざまな疑問を現地を旅することによって調査し、現地からも問題提起をされて、それを引き受けて沖縄に帰ってきて、ときどき泡盛を飲みながら考えるということをしてきたわけです。

そのように自らの身体を動かしながら、小さな島々を舞台にした琉球王国の世界というものを考えていくということをやってきましたということでもあります。1枚目に戻りましょう。一応、それが私のやってきた研究テーマであります。

次に、その中でなぜ首里城なのかという問題に移りたいと思いますが、実は3ページの地図にありますように、まさに東アジアと東南アジアという広い世界を駆け抜けたといえますか、行き来した琉球王国の人間たちですよけれども、いったい誰がそういう交流活動を担っていたのかと。つまり、その活動、事業の一番中心的な存在は誰なのかということ。

これは琉球王国の問題に絡むのですけれども、結論から言うと、実はそれは首里城に君臨する王だった。王様がアジアとの交流事業の経営責任者、事業主体だったことが、さまざまな資料を使って明らかにできます。

そうすると、東南アジアに行った船は、要するに王が持つ船、公的な船。船に乗っていく人間たち、スタッフたちも、王の家

来だったというわけです。それを証明するさまざまな資料が残っています。

ですから、首里城というものは、琉球の島々を支配する政治・行政的な拠点であっただけでなく、アジアとの交流事業の総本部というか、ヘッドクォーターとして機能していたということが明らかになるわけです。

首里城の王は、例えばマラッカ、いまのマレーシアに行くメンバーたちがいるとしますと、その壮行会、激励会のようなものは首里城で行うのです。王が臨席して行きます。そして、船の航海の無事を祈るイベントが開かれます。そのイベントの中心部分は女性たちによって行われた。神に仕える女性、神女というのが当時琉球にはたくさんおまして、彼女たちは霊力があり、霊的なパワーが高いわけです。その人たちが神様にお願いする神歌、「おもろ」といいますが、それを歌って航海安全を祈ります。

その歌が実はたくさん残っています。『おもろさうし』という文献にその歌が残されていて、非常に昔の古い言葉で書いてあるので、現代人はほとんど理解することができないという歌ですけれども、それをさまざまな専門家たちが分析して、いまはだいたいその意味が解明されております。その歌を読みますと、やはり女性たちが神から与えられた霊力を使って、この航海の無事を祈るという作業をしたことが分かっています。

そのほかに『おもろさうし』という資料の中には、首里城の王様が自ら神歌を歌ったと。こういう歌をつくったのだと書いてある。王様も、これからマラッカに行く船の無事を強く願ったことが、この歌の中に示されております。ですから、アジアとの交流事業というのは、琉球王国にとっては実は極めて大事で、王が自ら激励会を開き、そして神歌を歌って家来たちを送っていく、

そういうものだったということが分かります。

これは私、歴史研究者の想像ですけれども、マラッカから帰ってきますと、今度は慰労会が首里城で行われるのですが、たぶん首里城というお城は、大げさに言えば、当時アジアの中で最もさまざまな情報が飛び交う場所。マラッカでこんなことがあったとか、アユタヤでこんなことがあった、現在のインドネシアのパレンバンでこんなことがあったとか。これは小さな島なのに、日常的にアジアのさまざまな情報が飛び交うような、そういうお城だったと思いますね。

実際にそれを証明する、いくつかの記録が残っています。例えば、3 ページの地図の中で、現在のインドネシアのスマトラ島の南東部に、パレンバンという国際貿易港がありました。私はここに3回ほど行きましたけれども、ムシ川という巨大な川が海に注いでいまして、その川を70キロ、80キロさかのぼったところに、このパレンバンという国際貿易港があったのですが、このパレンバンに関する琉球側の記録が残っています。

琉球の船がパレンバンに貿易に来たときに、パレンバンの人間がこう言ったというのですね。「『おたくの琉球の船は、最近アユタヤに来ていない。また来てくれませんか』というメッセージ、言付けを、われわれはアユタヤの人間から言われている」という話です。うんと離れたアユタヤの人たちからのお願い事が、パレンバンの人間に伝えられていて、この港町を訪れた琉球の人間に、「アユタヤにまた来てくれと向こうは言っているよ」という伝言を頼まれているのですね。

なぜそんなことがあったかというのは理由がありまして、当時の記録が残っていません。琉球の船がアユタヤに行ったときに、

向こうにややたちの悪い貿易庁長官がいます。琉球の船に対して高い関税をかけたのです。それでは、遠く海を越えてやってきた琉球の人間としては合わないじゃないか、大損じゃないかといって、琉球側はアユタヤの王に文句を言うのです。改善してくれと。

しかし、数年間はなかなか改善されなかった。ついに琉球の人間は、抗議の意味でアユタヤ行きの船をストップするのです。その代わり、熱心にパレンバンに行くようになるのです。したがって、アユタヤとしては琉球の船が来ないと困るものですから、それで「来てくださいと言っていますよ」とパレンバンの人に言われたわけです。

その伝言を聞いて、翌年、琉球の船が再びアユタヤに行くようになっておりまして、そのときにアユタヤ側からは、問題の貿易庁長官を首にしたと。琉球に対して、不当な関税はかけないという措置をとることにしたという説明があったと。そういった記録が、琉球側の記録に残っています。

ですから、そういう小さな島々を治める首里城というお城ですけれども、まさに 3 ページに示しましたようにアジア狭しと活動していたものですから、そういう国際海外情報が、まるで日常会話のようなかたちでささやかれる状況だったのではないかと思います。

その首里城のことですけれども、1 枚目に戻りまして、首里城というのは要するに、島々を統治した琉球王国の司令塔だったのですが、分かりやすく言うと、1429 年に首里城の王が琉球の島々を唯一支配する。敵対勢力を平らげて、首里城の王だけが琉球ナンバーワンであるという状況が、1429 年途中に達成されます。これから数えますと、1879 年まで約 450 年、500 年に近い期間、首里城は琉球の島々に君臨する司令塔としての機能を担い続けてきたということであ

ります。

2 ページのメモの 1879 (明治 12) 年のところに、琉球処分と書いて沖縄県設置と書いてありますが、実はこの年に首里城の役割が終わります。

どのように終わったかということ、この少し前に、日本では明治維新によって徳川幕府が倒れて、日本は新しい近代国家としてスタートします。南のほうの琉球王国をどうすると、当時明治政府の首脳は議論しておりまして、その議論の様子が東京の外務省の外交史料館に残っています。それを見ましたけれども、いろいろな議論をしていますが、最終的には琉球王国を廃止して、そこに沖縄県を置いて、正式に日本の領土に編入するという結論に達します。

しかし、琉球側はなかなか言うことを聞かない。実は大変にすったもんだのことが起こるのですけれども、当時の中国がクレームをつけるのです。中国と日本はやがて戦争になりかねないというぐらいまで、琉球問題でもめることが起こりますけれども、最終的には明治政府、当時の日本の近代政府はどうしたかということ、日本の本土から軍隊と警察を動員しまして、首里城を取り囲んで、強圧的に首里城の明け渡しを命じるわけです。これが明治 12 (1879) 年の春の出来事でした。

当時の王様が、家来とともに首里城を出るわけです。その当時の状況が、明治政府側の記録に残っております。城を出た王様が、どんな思いを抱いていたのかということ伝える記録はありませんけれども、さまざまな断片的な記録を突き合わせてみますと、本当にみんなうなだれて、もう琉球という時代は終わったのだと、深刻な顔をして城を出ていったと。その瞬間に、明治政府は首里城を封印します。門にすべて兵士を立てて、当時の琉球の人間が首里城に出入りできないようなかたちにするのです。

そうやって琉球王国は滅んで、その司令塔であった、アジアとの交流事業の中心でもあった首里城の役割が終わります。

それ以降の首里城はどうなったかという、1枚目に書いてありますが、そのまま軍隊が駐屯しました。当時、日本という国は新しい軍事制度をつくるのですが、全国をいくつかのブロックに分けるのですね。九州・沖縄地区のブロックの拠点には熊本にありました。西南方面の軍隊の拠点は熊本だったのですが、熊本鎮台といった軍隊。その分遣隊という一部隊が首里城に駐屯します。首里城は琉球王国の司令塔、アジアとの交流の中心的な場所という時代が終わって、軍隊の駐屯所になるという、まったく予想もしない歴史の展開になっていく。

首里城の施設は、当然軍隊が使い勝手がいいように建物を壊したり、窓のないところに窓を付けたりしますので、その間に首里城がかなり改変されます。一部破壊もされております。この破壊の実態はどうであったか。後で触れますが、私は首里城の復元にメンバーとして深くかかわったのですけれども、首里城を知るためには、首里城に駐屯した軍隊がどの程度首里城をいじったのか、破壊したのか、形を変えたのかという情報が必要です。

そこで熊本に行きまして、現在は自衛隊の大きな基地が熊本にありますけれども、そこには何の資料もなかった。向こうの人に聞いたら、東京にあるんじゃないですかというので、いろいろ情報収集しましたら、東京に恵比寿という場所があって、そこに実は防衛研究所というのがあります。いまの防衛省ですね。その図書館には、日本の近代の軍事に関する資料が全部集められていて、何度もそこに通ってやっと見つけ出しました。首里城に駐屯している軍隊の記録を見つけたのです。そして、彼らがいいたいどのように首里城を使ったのかとい

うことを分析したわけですか。どのように壊したのか、どのようにいじったのか。

例えば、ちょっと驚くべき話ですけれども、かつて首里城の中で最も聖なる建物があった。その聖なる建物を、首里城に駐屯していた軍隊の診察室に使っているのですね。そういうことが分かりまして、つまり、壊して形を変えて使ったという資料を分析すれば、壊される前の首里城が分かるわけです。そういう作業をしたということです。

それから、やがて軍隊は引き揚げます。明治29年でしたか、引き揚げるのですけれども、その後は首里城を地元沖縄の人たちがいろいろな学校に転用します。その中で、学校に使うために、壁だったところを開けて、壊してそこに窓をつくるのか、そういう学校に使われることによって、また首里城が壊されたり、形が変えられたりすることが起こります。これは地元の人たちがそういうことをしたわけですね。

そして、やがて心ある人たちによって、それはよくないと。これは琉球の歴史や文化のとても大事な遺産じゃないかといって、そこに奔走した人間は地元の人ではありません。当時、東京大学の建築の先生であった伊東忠太という方と、いまの四国の香川県出身の鎌倉芳太郎というお二方が中心になって動いて、とにかく首里城をこれ以上壊さないでおこうといって、東京を駆け巡って予算を取ってきて、首里城の解体修理をします。昭和の初めです。

そして首里城が国宝文化財に指定されて、のちのち琉球の歴史や文化遺産として後世に伝えられるはずだったのですが、太平洋戦争末期の沖縄戦によって、アメリカの集中砲火を受けます。空から海から。そのときの写真と映像がアメリカ軍によって記録されています。それを収集して、われわれも見ましたけれども、首里城が炎を上げて燃えている。

アメリカ軍は面白いですね。情報収集のために偵察機を飛ばしてしまっていて、上空から空撮をしているのです。その写真がアメリカに残ってしまっていて、その3日後に首里城は跡形もないという写真があります。

なぜ、そんなことをアメリカ軍はしたのか。首里城が憎かったというわけではありません。当時、沖縄を守っていた日本軍は第32軍という軍隊ですが、太平洋戦争も終わりのころですから、日米の軍事力の差は圧倒的に日本が不利な状態になっています。

そこで、その軍隊がどういうことを考えたかという、アメリカ軍を中心とする連合軍が日本の本土に上陸作戦を展開するという、その時間をできるだけ遅らせよう。そのためには、沖縄でアメリカ軍をできるだけ引き付けておいて、時間稼ぎをしなければならないということだったようです。当時の大本營の資料を読むと、作戦はそうです。沖縄で時間を稼ぐと。そのために首里城の地下に防空壕を掘って、当時の第32軍という沖縄守備軍の司令部を置いたのです。

アメリカは偵察機を飛ばして情報収集をしていますから、当然それは把握されている。つまりアメリカ軍は、首里城を壊すために空と海から集中砲火を浴びせたのではなくて、地下にある日本軍の司令部をたたくという軍事作戦に出たわけですね。それで結果としては、地上にある首里城が跡形もなく、完膚なきまでに破壊されたという状況であったわけです。

その戦争が終わって、皆さんご存じのように沖縄はアメリカ軍に占領されて、47都道府県から沖縄県のみを分割して、アメリカの直接統治、支配という体制に置かれます。アメリカは冷戦がやがて始まりますので、世界に大きな軍事拠点を建設する必要があったわけですが、それに適していたのが沖縄だったわけですから、使い勝手がいい

ように日本の施政権から分離して、アメリカが直接に沖縄を支配するという体制が誕生します。まさに基地建設のために、あるいは軍事的な、戦略的な目的のために、沖縄県の島々を利用するというか、活用するということになりました。

そのアメリカ統治の中で、私が勤めております琉球大学という大学が、1950年、終戦の5年後に首里城の跡に建設される。キャンパスになっていくのです。そこでさまざまな人材が育っていくわけでありませうけれども、やがて沖縄の人たちはアメリカ統治の中から、自分たちの祖国は日本だという声が高まって、日本に復帰しなければならないという運動が高まり、やがてアメリカ統治時代が終わります。しかし、基地を残したままで沖縄が日本に返還されるという、これが1972(昭和47)年のことです。

そのことによって琉球大学が国立大学になりまして、キャンパスが狭いというので、首里城の跡に置かれたキャンパスから、現在の新しいキャンパスを求めて移転することになり、琉球大学が移った後に、その場所をどのように使いますかという跡地利用検討というものが始まっていて、実は私はそのときから深くかかわったというわけです。

検討委員会が何度も開かれましたけれども、結論は、首里城の建物の復元を含む歴史公園として整備したらいいじゃないかというようなことに決まりました。誰が考えても、結論はそのようにしかならないわけですね。

問題になったのは、では、いったい誰がその事業を中心になってやるのかと。お金にして何百億円。当然、200億円とか500億円というお金が必要になってくる。あるいは、もっと必要かもしれません。それをどうするかという、ちょっと難しい問題は

たくさんあったのですが、何とかクリアしまして、一応首里城の建物の復元を含む歴史公園として、首里城復元プロジェクトを進めていこうという結論に達しまして、それ以降、本格的な首里城の復元作業が始まっていくという流れになります。

まず、どのレベルで首里城を復元するのかということが当然問題になります。一番手っ取り早い方法は、アメリカ軍に破壊される前、戦争の前の首里城を復元すればいいじゃないかと。写真もたくさんあります。アメリカ軍が空から撮った写真もあります。一番楽ちんです。それから、戦争で破壊される前の首里城で遊んだとか、見学したという、首里城をたくさん覚えていらっしゃる方もいるわけですから、そういう点でいけば、戦争で破壊される前の首里城を復元するのが一番楽なのですが、われわれはあえてそのことを目的にしなかった。

当時、われわれは酔っぱらうといつも言っていたのですが、われわれがやろうとしているのは中古車を復元するのではないと。ぴかぴかの新車を復元しよう。つまり、首里城に王がいて、家来がいて、アジアとの交流の拠点になっていて、島々を支配する体制が息づいていたころ。つまり首里城が生きて呼吸している、現役であった、それをわれわれは新車と言ひ、その新車を復元するんだというように、われわれはよく言ったのですが、目標をそうしました。往時の首里城を復元するという事です。

そうすると、これは言うのは簡単ですけども、誰も見たことがないわけです。何しろアメリカ軍が破壊する前の首里城というのは、王様が明治 12 年に首里城から出まして、軍隊の駐屯所になって、やがて学校に使われたりして、解体修理があつてというように、実は元首里城、首里城跡というのが、その後続いただけの話です。

それを明治 12 年の春、琉球王国がなくな

る以前の状態に戻そうという、とんでもないテーマを掲げたわけですから、それがいかに困難であるかということは当然予想されたわけですがけれども、それはたぶんわれわれの責任だろうと。ハードルを一番高くしておいて事業をしたほうが、はるかに多くのことが深められるのではないかという思いです。

具体的には、それは二つのことを意味する。まず、首里城に関する本格的な研究を始めてみようということになります。首里城を研究しなければ、まさに首里城を解剖しなければ復元はできない。当然、そういうことを意味するわけですね。

そのためには、二つ目は何かというと、徹底した資料収集をしよう。それは、先ほどのアメリカ軍が撮った空撮の写真から、戦前の古写真は当然です。発掘調査をして地下に埋まっている情報を採る、それも当然です。琉球王国時代の首里城に関するさまざまな資料を、徹底的に収集して分析する。

例えば、首里城を訪問したのは、皆さんご存じかもしれませんが、1853 年にペリー艦隊が日本に来ますね。浦賀に黒船が来るわけですが、ペリー艦隊がどのような行動をしたか分かりますか。ペリー艦隊はアメリカのバージニア州のノーフォークという海軍の基地を出発して、大西洋を南に下って、アフリカの喜望峰を迂回（うかい）して、それからインド洋に出て、マラッカ海峡に出て香港に来るのです。アメリカを出発したのはほぼ同じですけども、みんな途中でばらばらになりますから、香港がゴールだったのです。香港に終結してペリー艦隊が編制されるのです。

ペリー艦隊はビクトリア湾で編制されて、そして上海に行きます。上海で日本に行くための準備をするのです。そして、ペリー艦隊は一挙に東シナ海を越えて、那覇にそ

の姿を現した。那覇にスタッフや船を残して、それから主な艦隊を率いて、ペリーは浦賀に行くのです。

ですから、浦賀に行ったとき、実は那覇にはスタッフや船が残っているのです。琉球という場所が、対日本交渉の拠点として非常に使い勝手がいいと、ペリーは分析している。ペリー側の資料を見ると、彼は最初からそういう戦略を立てて行動したことが分かっています。

ちょっと余談ですが、大西洋に浮かぶマデイラ諸島というポルトガル領の島々があります。私も1回、行ったことがあります。行ったときにすでに、徳川幕府がかたくなに開国を拒んで、アメリカとの条約を結ばないというときには、私の考えでは琉球諸島を押さえて、そこに拠点を置きたいと、アメリカの大統領に出した意見書が残っています。それぐらいに琉球の地理的な位置というものを、ペリーは分かっていたということですが。

そのペリー艦隊は、琉球で天文観測をしたり、当時実用化が始まっていた潜水服を着けて、沖縄の海にサンゴ礁を見に潜って、海底地形であるとか亜熱帯の魚のスケッチも書いています。それから、現在、アメリカを代表する植物園としてニューヨーク植物園がありますが、実はその奥のほうには、ペリー艦隊が琉球で収集した植物の標本がいまでも保存されています。私は1回だけ調査に行ったことがあります。

そのように、ペリー艦隊と琉球は、実は深いかわりがあります。現在、那覇市に泊外人墓地がありますが、ペリー艦隊の水兵たちのお墓が4基か5基、いまでも残っています。サスケハナ号の乗組員のお墓とか、そういうものが残っています。

そのペリー艦隊は首里城を訪問しておりまして、彼らが残したスケッチが残っているのです。つまり、ペリーが訪れた首里城

をどのように見たかというのをも分析する。とにかく首里城というものの現役時代を理解するためには、さまざまな資料を検討する。歴史の研究は私の専門ですから、その作業の中心は私になりました。

例えば、沖縄は戦争で相当焼かれましたけれども、沖縄の県民が必死になって守った系図があります。その系図をずっと収集して、検討して、ある家の系図の中に、何代目の方が何年何月何日から何日まで、城のどういう建物の修理工事に参加したかと、そういう履歴まで徹底的に洗いました。そうすると、いつごろこの建物のどういうところを修理したんだねとか、増築したんだねという情報が得られます。

そういう、とにかく徹底的な情報収集。つまり、新車としての首里城を復元するため、復元に必要な資料をどれぐらいストックできるかということが問題で、それをやったのです。手分けして徹底的にやりました。

例えば鹿児島県に行きまして、『南日本新聞』という新聞が鹿児島県には出ていませんけれども、そこに知り合いの記者の方がいて、天文館という繁華街で飲みながら言ったのは、「目的は、とにかくこういう資料が必要なんだ」と。「じゃあ分かった。鹿児島県の県民の中で資料を持っている人がいるかもしれないから、呼びかけようね」といって、一つの欄をつくってもらいました。高良が鹿児島に来ていて、首里城を復元しようとしていて、とにかく資料が欲しいと訴えたものを記事にしてもらって、そうしたら鹿児島から30数件でしたか、たくさんの情報が寄せられました。

そのように、要するに徹底的に資料を集めて分析をするという。そして、その資料に基づいて徹底的に首里城を解剖して、そこから復元に必要な資料を抽出する。取り出していくわけです。

そしてその情報を、一緒に作業している建築家の人間たちと形にしてみるという作業をずっと繰り返しながら、例えばこの建物のこの壁はどんな壁なのかと。向こうの奥にある柱は、円い柱なのか、四角い柱なのかと。円い柱だったら、直径はいったい何センチなのかと。上のほうでどのように組み合わさっているのかという非常に細かい作業を、ずっとそういったものを通じてやります。

それから、先ほど、首里城でアジアに出掛けていく家来たちの壮行会とか、慰労会が行われると言いました。そういうイベントをしたときの資料が残っています。首里城の平面図があって、このイベントはこのようにやったのだと。そういったものを分析します。

その資料は、この慰労会のときに人はどうやって動くか、どこにどういうディスプレイをして物が置いてあるかということの資料なのですが、それは同時に建築的な資料になる。この広場がどう使われたのかと。この広場の中で一番尊い場所はどこなのか。どこがイベントの中心的な場所なのかということが分かります。要するに、この広場のこの場所にこんな意味があるから、建物がこういう配置になっているんだというように分かっていくというわけです。

それから、首里城には中国の北京の皇帝のミッションが、しばしば派遣されてきた。400、500人の中国人が琉球に来るのです。彼らを迎えた大変な大イベントが、首里城の「御庭（うなー）」と呼ばれている広場で行われました。そのイベントは、実は大変重要でして、琉球という小さな国が、いかに文化力が高いかということアピールする場面だったのですけれども、首里城の御庭（うなー）という、40メートル×50メートルぐらいの広場で、あしたご覧になったらいいと思いますが、そこに仮設のステ

ージをつくるのです。そして琉球の最高の芸能を、ここで中国人に見せるのです。

このあいだ、ユネスコ（国連教育科学文化機関）が「組踊」を世界無形文化遺産に指定しました。皆さんは昨日、それをご覧になったようだけれども。あれは実は、首里城の御庭（うなー）につくられた仮設ステージで演じられた。あれが最高のステージだったのです。そのときに、中国の人間たちは筋書きが分かりませんから、この出し物はこんなあらすじですよと、中国語で書いたあらすじがいまでも残っています。

北京に行きましたら、やってきた中国の人間たちはそれを見て、こんな意味で琉球の人に教えられて、とても感動した芸だったと、そういう感想を書き残しています。

ですから、そういった大変大事な芸能フェスティバルといいますか、芸能祭典といいますか。そのデータを集めて、仮設ステージをどこにどうやってつくったのかと。どこに地方（じかた）という楽団がいるのかと。役者はいったいどの建物から出てきて、どこでコスチュームを着けて出てくるのかと。そういう芸能関係のものを分析することによって、首里城の建物が分かってきます。つまり、現役で使われていた首里城を見ることによって、そこから呼吸をしていた首里城の情報を採るという作業も、ずいぶんしたわけです。

現在、その情報は、われわれ側の復元する組織の中に蓄えられていまして、どんな資料を集めたのか、その資料を分析することによって、どんな復元の根拠をわれわれは積み上げてきたのか。しかも、重要な会議については録音してありますし、映像でも撮ってあります。

なぜそんなことをしたかという、われわれのメンバーたちが復元したものは、こういう資料に基づいて、こういう根拠で、このように意志決定をして、こういう図面

に起こして復元しましたということ、後世の人間に伝えていくためです。そういう伝えていくためのものを残しながら、整備しながら、われわれは復元作業をしている。つまり、これは後世に対する説明責任を果たさなければならないという思いで、そのことをやってきたということです。

ただ残念なのは、復元の作業は続いています、忙しくて、これを多くの人たちにデジタル化して見てもらえるようなかたち、データベースにしてみたりとか、そういった作業に、いまのところなかなか力が発揮できないのです。一部はやっていますけれども。復元の中で、そういうことにもっと力を入れてやっていかなければならないなということは、つくづく感じていますけれども、これは今後の大きな課題ということになるだろうと思います。

復元は、要するに徹底して首里城を解剖することだと。それは当然、徹底した資料収集に基づくということだったわけですが、どれぐらいこだわったかという話を一つ例に挙げますと、一番最後の資料を見てください。先ほど触れましたように、この絵は、あと5年、10年たちますと、こんなものが仕上がりますという絵です。これに向けて、いま着々と検討作業を続けています。週に2、3回ぐらい、テーマの異なったプロジェクトがあって、私は大学の仕事の傍ら、首里城の作業にいまだうつつを抜かしているのですけれども。

例えば、分かりますかね。この真ん中辺に下之御庭と書いてある、そこに首里森御嶽という場所があります。実はこれは、首里城のとても精神的に大事な場所です。これはすでに復元しました。

これは実は、復元するのが大変だったのですが、まったく写真が残っていない。デフォルメされた絵が1枚だけ残っている。それを出発点にして、さまざまな分析、検

討を加えて、これはお祈りをする場所なのです。小さな石垣で囲まれていまして、その前に昔はむしろを敷いて、畳を置いて、そこでお祈りをする。女性たちが祈った場所ですけれども。そこで歌われた神歌も残っていますが、問題なのは、そこは神様が降りてくる場所なのです。神様はどこに降りてくるか。この首里森御嶽の中に樹木が生えていまして、その樹木を使って降りてくるわけですね。

この中に生えている木は、いったい何という木なのか。これが分からなかった。この木を間違えたら天罰が下りますから、ちゃんと昔と同じ木を植えなければなりません。そこでいろいろ検討したのですけれども、がちが明かない。ギブアップだなど。分かるまでは植えないでおこうと。植えないと神様が降りてこないし、どうしようという話だったのですが。

結局、すごく困ったときに、やはり世の中すごいなと思うのですけれども、ある友人から、東京の宮内庁の書陵部という、たくさん資料を持っているすごい資料館ですけれども、そこから「実は変な写真がある」という連絡がありまして、送ってもらったのです。どうも首里城らしいということだった。

見た瞬間に、2メートルぐらいジャンプしたのではないのでしょうか。あっ、あの木だと。首里城には奉神門という門がありますが、奉神門という門をこの写真は写したのです。奉る神と書いた長い門があります。その門を写した、もちろん白黒の写真ですが、奉神門を撮ったつむりの写真に、右手のほうに木の枝が伸びているのです。それは、いま私たちが探し求めている、首里森御嶽という中に生えて神様が降りてくる木が、奉神門の前に枝を伸ばしている状態の写真だと、すぐ分かりました。

さて、この木はいったい何の木なのかと

いうことを、ピンぼけの白黒写真から植物の専門家に見てもらったのですが、二つの説に分かれたのです。見事に分かれましたね。Aグループは、これはガジュマルという木ですよ。もう断言しますと言っていた。Bのグループは、いや、そうじゃないと。ハマイヌビワという木だと。断言しますよと言うのです。いったいどうしよう。

ガジュマルとハマイヌビワというのは、ちょっと似ていますが、決して親せきではない木です。困ったな、両方植えるわけにはいかないしと思ひまして、じゃあといって、その場所を県の教育委員会の埋蔵文化財保護課の人に掘ってもらった。ずっと下まで掘って、下には岩盤があります。岩盤まで掘ってもらったのです。そうしたら、こんな小さな木の根っこが4本出てきた。この根っこを琉球大学農学部の専門家に分析してもらって、組織を見てもらって、それでガジュマルだと分かったのです。じゃあガジュマルだと。

そして、この首里森御嶽という場所は、木が育つにはちょっと環境の悪いところですから、そこと同じ環境で生えているガジュマルの木を探してきて、そこに植えたのです。当然、私たちの期待としては、このガジュマルが将来成長していくと、宮内庁の写真のように枝ぶりになる木を選びました。それぐらいこだわって復元しました。当然、その写真も分析したデータも全部、首里城の復元資料としてストックされています。

そんな、ちょっと病みみたいなのところもありますけれども、そんな作業をしながら、新車を復元するというすごく強いこだわりがないと、息づいていた首里城には達しないという話です。

なぜそれにこだわるか、なぜ新車、呼吸している首里城を復元するかというと、繰り返しになりますけれども、後世のわれわ

れが志というテーマを高くすることによって、より首里城に近づくことができる。われわれが首里城に近づくことができたなら、それがたぶん、一応納得のいく復元になるのではないかという思いがあったから、そういうことをしたということでもあります。

首里城という建物は、1992年に一応60パーセント弱ができて一般公開されまして、いまでも着々と復元作業が進んでいますけれども、年間に240万、250万人ぐらいのお客さんが入る非常に人気のあるスポットになっていまして、他府県から修学旅行生もたくさん来ます。それで、お客さんにアンケートを書いてもらっています。首里城のどういう点を改善してほしいとか、ここはおかしいよとか。

私はときどき、そのアンケートを読むのですけれども、一番面白かったのは、たぶん女子高生のような人が書いたアンケートで、私は笑ってしまったのですけれども、「首里城を見たけど、建物が中華料理店の化け物みたいだった」と。赤い色で塗られていますから。普通、古色蒼然たる本土のお寺とか城を見ている人間からすると、あの派手派手な色は何なんだと思った。たぶん、中国っぽい感じもしたでしょう。

でも、これは正直な感想だと思います。私たちはあまり見たことがないよと。だから中華料理店の化け物という話になったのだと思いますが、それは当たっているのです。その高校生が言った感想というものは、日本のお城というカテゴリーの中で見るとそう感じる。それは当たり前です。こんなタイプの城は他府県にないからです。

ところが、首里城を日本の国内の枠組みで比較するのではなく、アジアというものに置いてみると、実は首里城のほうが一般的なのです。例えば、韓国のソウルに行きますと、ソウルには朝鮮王国時代の宮殿がたくさん残っています。首里城の親せきの

ような大きさであるし、形をしています。景福宮などもそうですね。

それから、中国に行きますと、遼寧省の瀋陽という町に、中国の最後の王朝だった清の初代・二代の皇帝が君臨した宮殿、瀋陽故宮がいまでも残っています。私もそこに調査に行きましたけれども、首里城と非常に近い。北京の紫禁城は規模は違いますが、実はあの紫禁城をお手本にして首里城はつくられましたから。

もう一つ例を挙げますと、ベトナムの中部あたりにフエという古い都があります。ベトナム最後の王朝だったグエン王朝の都だったところですが、そこにも宮殿が残ってしまっていて、ベトナム戦争とかインドシナ戦争でだいぶダメージを受けて、いま日本を中心にして復元修理工事が進んでいますけれども、あのフエの故宮を見たときにも首里城の親せきだと思いました。

実はアジアでは、首里城のほうが一般的な形なのです。アジアに置くと首里城が普通で、日本の中に置くと首里城が変になる。なぜあんなに派手派手なのという話になってしまうわけです。まさにそれは、琉球の歴史や文化というものを大変象徴していることだろうと思います。

それから、その派手派手の首里城の色を誰が塗ったか。われわれにとって一番の難問の一つは、建物の壁や柱に、弁柄（べんがら）を中心とした、漆を混ぜたものが相当塗られている。実は首里城の復元の際に、弁柄や漆を首里城に使いすぎたために、日本の漆の値段がこんなに跳ね上がった。そんなこともありましたけれども。

調べてみたら、首里城の建物の塗装工事に参加したのは、私は資料をずっと見て見つけたわけですが、琉球漆器をつくっている職人さんたちだったのです。当時は貝摺（かいずり）奉行と呼ばれている、琉球漆器をつくる重要な拠点がありま

して、その漆を扱う専門家たちが建築の塗装工事に参加しているのです。

これは実は、驚くべき発見でした。なるほど。普段は器に漆を塗る人間たちが参加していたのだと。ということは、この難しい問題は琉球漆器を見ればいいのだと。そこで県立博物館、隣の浦添市美術館に行き、彼らが日常的に漆を使って、どのように塗っていたかということで、みんなで漆を観察したのです。

下地をどうやってつくっていくのか。下地をつくって、上に1回目を塗ります。そして乾燥させます。またそれに2回目の塗りを加える。また乾燥させて3回目を塗っていきます。つまり、漆器と同じ手法で、実は建物の壁や柱が塗られていた。だから私たちはそのときも、首里城の建物というのは、要するに琉球漆器の化け物なのだと思います。つまり、琉球漆器を見ることによって、首里城の建物が分かるということでした。

ですから、そのために漆器の専門家たちにも加わってもらって、まさにでかい琉球漆器をつくる作業をみんなでしてきたと。あした行かれますと、首里城はいま塗り替え工事を行っています。もう10何年もたちましたから劣化していますので、その塗ったものが傷んだデータをちゃんと取っています。どういう原因で塗装が劣化したのか、何が問題だったのかということも検討した上ではぎ落として、さらに下地をつくって塗っています。たぶん、いま一番面白い塗り替え作業をやっていますので、面白い場面がご覧になれると思いますが、そんなことでした。

そうやって首里城の復元というものに取り組んできた。われわれ中心になったメンバーたちの思いは、いろいろありますけれども、一つはまずこういうことです。

首里城は沖縄戦によって破壊された。沖

縄戦では、当時の沖縄の人口の4人に一人、25パーセントの人が犠牲になったわけです。当然、命は助かったけれども、大切な肉親をたくさん失ったわけですから、皆悲しみをこらえて、悲しみを抱きながら戦後という激動の時代を歩いていくわけですが、そういう戦争で人の命が失われ、首里城のような文化遺産も破壊されました。

しかし、生きている人間たちが頑張れば、人の命は戻ってこないけれども、失った文化遺産を取り戻せるだろうと。つまり、戦争で失ったものを取り戻そうじゃないかというのが、一つわれわれの合い言葉だった。

二つ目は、この島がかつて琉球、あるいは琉球王国と呼ばれていて、500年にわたって首里城がその中心として存在していて、そこで政治や行政、アジアとの交流や、先ほど申し上げたように最高の芸能のステージがあり、沖縄の一番磨かれた文化がそこで発信されたということも含めて、文化の拠点でもあったわけです。そういう歴史や文化の象徴としての首里城というものを、過去のためではなくて、過去そういったものが存在したことを未来に伝えるために、首里城が必要ではないかと。

あるいは、沖縄の若い、次の時代を担っていく子どもたちに、皆さんが生まれて暮らしているこの島には、こんな歴史があるんですよということを、首里城を通じて問題意識を持って感じてもらえればいい。あるいは、沖縄を訪れる県外からのお客さんや、国外からのお客さんにも、美しい海、観光リゾートだけではなくて、この島に首里城というお城を持つような歴史があったことを感じてほしい。アピールしてもらえ、そういう力にもなります。

ですから、戦争で失ったものを取り戻すということと、琉球あるいは琉球王国というものをアピールするために、首里城が必要なのだという思いで取り組んできました

し、いまもそうですし、これからもしばらく取り組んでいくことになるだろうと思います。

最後に、首里城の建物の復元が着々と進んでいるわけですが、それをひとにぎりの関係者だけのためにしたくないという思いがあったものですから、まず何をしたかという、ひと月おきに開かれる首里城研究会という研究会があります。私がおの会長をしていますが、要するに首里城にかかわった専門家たちとプラスアルファの人たちが、いまでもそれぞれの問題解決に沿って研究を進めていて、ひと月おきに誰かが研究発表をしてディスカッションをするということもやっています。

それから、最も大事なものは、首里城公園友の会というものをつくりました。会員数が1,200人ぐらいいます。沖縄の県民のみではなく他府県の方々でも、熱心な方が年間2,000円の会費を払って会員になっていただいています。

なぜその会をつくったかという、首里城を勉強しようという、子どものための首里城の解説会であるとか、親子向けの解説会であるとか、とにかく復元した首里城をみんなで勉強しようじゃないかということをやっています。

それから、首里城のみが大事なのではなくて、首里城に関連する県内のさまざまな史跡をみんなで訪ねて勉強するという、スタディーツアーを頻繁にやっております。それから、鹿児島県や他の県も含めて、琉球の歴史や文化と深いかわりがある地域についても、スタディーツアーを企画してやっています。国外もそうです。そういうお勉強しようというような活動を活発にやっていますし、文化講演会もやっております。

首里城公園友の会は私が事務局長なのですけれども、その中の大事な事業の一つは、

実はこの島の一番北のほうの亜熱帯の森に、イヌマキの木を 4,000 本植えています。友の会の会員が、毎年 2 回草刈りをして肥料をあげる、育樹祭というイベントをやっています。たくさんの方が参加してくれます。

なぜそんなことをしているかという、当時、琉球王国で現役だった首里城の建物は、イヌマキが中心的な材だったのです。シロアリが食わない、台風が頻繁に襲ってくる沖縄の風土の中で非常に耐久性の高い木が、実はこのイヌマキという木だったのです。ですから、琉球王国時代は計画的にイヌマキを植えて育てていまして、それを使ってイヌマキが自給できたのです。

ところが、首里城を復元するときに県内でイヌマキを調べてみたら、ストックが何もない。みんな切った後に植えていないわけです。育てていない。では、首里城復元ではどうしたかという、結局は県内で調達できずに、鹿児島県、宮崎県、大分県という県外の方々をお願いして、いいですよ、喜んでと提供していただいて、首里城を復元しました。

50 年、100 年先に、首里城は当然、大規模な修理が必要になってきます。そのときは県産材を使いたいという思いがありました。そのために、将来のためにイヌマキを 4,000 本植えて、いまそれを育てている。いまだいたい 3 メートル、4 メートルぐらいに成長していますけれども、たぶん 50 年か 100 年後には立派な木になって、首里城の柱であるとか壁板に使われるような木になってくれると思います。そんなことをやっています。

もう一つ大事な問題は、建物の復元とか、建物と建物がつくる建築空間というものはよみがえりつつあります。こだわりを持ってつくっていますから、いろいろな問題点も多少ありますけれども、全体とすれば、いい出来栄えだとわれわれは思ってい

ます。

しかし、これは一種のハードなのです。かつて首里城ではさまざまな生活があって、儀式が行われて、仮設のステージで芸能が踊られたと言いました。1 年を通じてさまざまなイベント、行事があります。そこにはさまざまな生活の道具、イベントの道具がたくさんあったのです。そして首里城の周辺、城下町にいる王の家来たちも、たくさんのお宝を持っていたわけです。

しかし、何が起こったかという、明治 12 年の春に首里城から王様がいなくなって、琉球王国はなくなりました。次の日から、みんな生活に困る。どうしたか。みんなは、やがてお宝を売って生活することになるのです。首里城で使われていた道具や、周辺の家来たちのうちのお宝が次々と人手に渡って、それで生活をしていく。そのお宝は全部、県外や国外に流出しました。

これの、何がどのように流出したか、いまどこにあるのかという情報が必要です。さまざまな人が協力しました。例えば、ドイツのボン大学のヨーゼフ・クライナー先生たちも、ヨーロッパの琉球コレクションを調査してくれた。県の教育委員会は、アメリカですとか中国にあるコレクションを調査しました。いま世界のあちこちに、どれぐらいの琉球コレクションがあるかという概要は分かります。

私も調査しましたがけれども、例えばドイツのベルリンに、国立民族学博物館というドイツを代表する博物館があります。そこに行きますと、極めて膨大で、極めて優れた琉球コレクションがあります。明治 17 年ごろに、ドイツ政府が国家の予算を使って東京経由で買ったコレクションが、いまベルリンにあるのです。首里城から王様が出ていった、わずか 5 年後のことですよ。ドイツが収集したのです。これがベルリンにあります。すごいコレクションです。

それから、アメリカの東海岸にセーラムという町がありまして、ピーボディー・エセックス博物館というのがあります。そこに首里城のコレクションがかなり入っています。それから逸品は、私も本当に感動したコレクションがボストン美術館にあります。首里城で使われていた、一番最高の技術でつくられた琉球漆器がボストンにあります。それが海外に流出して、いまそこに収蔵されているという状況です。

その情報を、これまたさまざまな方が調査しましたがけれども、さらにもっと細かく調査していく課題が残っています。

しかし、ある人々はそういう状況に対して、返還運動をしたらどうかとか、ばかなことを言うやつがいる。そうじゃない。ヨーロッパの方々が、アメリカの方々が、そうやって収集してくれたおかげで残ったのです。あれが沖縄にあったら、沖縄戦で全部破壊されています。ですから、実は危険分散してくれたと。

しかもその方々は、ドイツの例を挙げますと、それを買って収集して、捨てなかった。大切に保存した。ドイツも第一次世界大戦、第二次世界大戦と、大変厳しい思いをしたにもかかわらず、それを保存してくれたのです。いい状態で保存されています。私はベルリンの博物館で見たときに感動しました。こんないい状態で残っているのだと。

ですから、海外にある、そういう収集し、保存し、危険分散してくれた琉球の遺産を、われわれ沖縄側はその情報を集めて、持っている機関と協力して、今後それをデジタル化して、まさにデジタルミュージアムのようなものをつくっていく課題が、これから求められています。

つまり、沖縄県内にあるもの、日本の国内にあるもの、海外にあるもの、それが一堂に会するようなミュージアムをつくる。

ロケーションはそれぞれの博物館でいいのです。そういったものをつくって、このミュージアムにアクセスすると、琉球のいま残っているすべてを見ることができるというような状況をつくっていくのが、今後の課題だろうと思っています。

そのほかに、首里城は幸いお客さんが入ってしまっていて、黒字が出ています。税金もちゃんと払っているようですけれども、そのほかに蓄えておられて、首里城基金というお金を蓄えています。それで何をしているかという、海外にあるコレクションの情報収集のためにこれを使います。それから、一部はレプリカをつくる。復元するための費用に使っております。

もう一つ、一番大きなものは、いまでも国内や国外で琉球ものがオークション（競り市）にかけられるので、それを買います。すでに何十億円という買いものをしています。実は首里城の中に、オークションで競り落とした琉球関係のコレクションが保存されて、一部を首里城で定期的に公開しているという状況です。

ですから、建物だけを復元して満足するのではなく、それを学習すること。そして、将来に備えてイヌマキのような木を植えて、子々孫々に伝えていくこと。首里城研究会のようなものを組織して、粛々と淡々と、若い世代も入れながら、少しずつ専門家同士のディスカッションを深めていくという。そして、失われた、流出していった、ありがたいことに世界が大切にしてくれている情報を、きちっと手に集めて、それを将来的には新しいタイプのミュージアムをつくっていくようなことにつなげたいということ。

それから、これからやろうといま検討していますけれども、例えばドイツのベルリンの琉球コレクションには芭蕉布があります。それから、麻で織った布があります。

見ますと、やはり少し傷んでいるものがある。しかしドイツには、それを修理する技術がない。

いまわれわれが考えているのは、沖縄から専門家を沖縄の費用で派遣して、向こうが持っているものを沖縄の費用で修理してあげる。あるいは、お預かりして修理してお返しするという作業を、沖縄の費用で、首里城基金を使ってやろうと思っています。

なぜ人の財産をやるのだと言う人がいるかもしれませんが、そうではない。あれはドイツの博物館のお宝であるけれども、われわれ沖縄県民のお宝でもある。みんなで力を合わせて、それをちゃんと修理して伝えていこうというような費用に充てる。そういうプロジェクトもこれから始めようと、いろいろな準備をしております。

そのためには、それぞれの琉球コレクションを持っている文化機関と仲よしになること、信頼関係を構築することですね。首里城基金を使って、例えばドイツの博物館の学芸員であるとか、ボストン美術館の人であるとか、そういった方々を沖縄にお招きして、沖縄の博物館にあるものを見てもらう。首里城を見てもらう。沖縄の自然や海を見てもらう。

ただ物だけ見るのではない。自分たちが持っているコレクションのバックグラウンドは何かということ、そこに琉球とか沖縄がどのように絡んでいるのかという問題を、やはりここに来て見てほしい。そして、できれば沖縄ファンになってほしい。そして私たちが言う無理難題を、いいよと聞いてくれるような関係を構築していこうということを思っております。

最後に申し上げたいことは、首里城復元プロジェクトは、ただ単にお城の復元だったのではないということでございます。そのことによって、首里城を中心とする歴史や文化というものに絡むさまざまな課題を

確認して、そのすべてはもちろん解決できませんけれども、そのいくつかの解決の糸口を見つけていくようなプロジェクトとして、最初から問題意識を持って設定されたものだったということでもあります。

いま難しい復元の作業にかかっています。資料があまりなくて、私は最近、「おまえは時代考証の**実験（？）**うまいだろう」とか言われていて、裏側の建物ですが、あまりアイデアがないので、夢枕に神様が降りてこないかと思っているのですが。そのように、しばしば弱気になったりするのですけれども、それでも時代考証をして、できるだけ復元を追加していきたいと思いません。

それから、国王の肖像画の復元をいまやっています。東京の国立文化財研究所（独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所）と東京藝術大学と一緒にあって、いまは白黒写真でしか残っていない歴代の琉球国王の、極彩色の絵を復元する作業で、たぶん2年後には1枚が完成すると思いますが、その作業をいまやっていたりします。ですから、まだまだエンドレスで首里城復元プロジェクトが進行中であるということでもあります。

あと10分ほど時間が余っておりますけれども、もし私の話を聞いて、ここが分かりづらかったとか、今日の話題に出なかったところで、これはどうなのというご質問がありましたら、私の理解している範囲内でお答えしたいと思ひまして、取りあえず私のおしゃべりはこれで終わります。

（終了）